

社会技術研究開発事業
平成22年度研究開発実施報告書

研究開発プログラム「科学技術と社会の相互作用」

研究開発プロジェクト名

「科学技術情報ハブとしてのサイエンス・メディア・
センターの構築」

研究代表者 瀬川 至朗
(早稲田大学政治経済学術院、教授)

1. 研究開発プロジェクト名

科学技術情報ハブとしてのサイエンス・メディア・センターの構築

2. 研究開発実施の要約

本研究開発プロジェクトにおいては、科学技術情報の適切な流通を図るため、科学技術分野の研究者と、新聞・テレビをはじめとするメディア関係者（ジャーナリスト）の交流を促進する「日本版サイエンス・メディア・センター」(Science Media Centre of Japan, SMCJ)の構築を目指す。

SMCJは、メディア関係者の科学技術に関するアジェンダ構築を助け、また、研究者に対しては社会への効率的な情報発信の道筋を開くことを主目的とする。「研究者とメディア関係者の出会いの場」の創出によりメディアに流通する科学技術情報の質的向上を図り、科学技術を巡る社会の議論に資することが期待される。

上記を目指した平成22年度の活動を成果を踏まえて概説すると、次のようなものになる：

- ・社会実装に向けた活動：先行事例に学び、「一般社団法人 サイエンス・メディア・センター」を設立した。またこのことにより、日豪交流基金からの資金提供を受けた。ジャーナリストに向け、科学技術サイドの視点を提供する「サイエンス・アラート」や「ホット・トピック」の発行を行った。
- ・科学者・メディア関係者データベースの構築と運用：活動に資するための人的データベースの構築整備を行った。
- ・国際活動：各国のSMCと協働し、科学技術情報の国際的流通の体制整備を進めると共に、実際にその活動を行った。
- ・情報発信活動：ネット時代における重要な要素であるUSTREAM中継を実施すると共に、そのノウハウを蓄積した。
- ・研究活動：科学技術報道の事例分析を通じ、日本社会において研究者とジャーナリストが協働して議題構築に資するための理論的・実践的枠組みを探索した。

こうした活動は、平成22年10月に活動を開始した「(社)サイエンス・メディア・センター」を中心に機能集約された。これにより、3月11日に発生した東日本大震災に対して、準備不十分ながらも成果を挙げる事が出来た。

3. 研究開発実施の具体的内容

(1) 研究開発目標

科学技術分野の研究者と、新聞・テレビをはじめとする「メディア関係者（ジャーナリスト）」の交流を促進する「日本版サイエンス・メディア・センター」(SMCJ)の構築を目指す。

SMCJは、メディア関係者の科学技術に関するアジェンダ構築を助け、また、研究者に対しては社会への効率的な情報発信の道筋を開くことを主目的とする。「研究者とメディア関係者の出会いの場」の創出によりメディアに流通する科学技術情報の質的向上を図り、科学技術を巡る社会の議論に資することを旨とする。

(2) 実施方法・実施内容

※SMCJは、東日本大震災の発生以降、とりわけ福島第一原発の事故に関係して、多彩かつ広範な活動を展開している。ただし震災の影響は今も収束しておらず、これに関連してのSMCJの活動も継続していることから、その一部は次平成23年度の報告に記載する予定である。

(2)-1：SMCJの社会実装に向けた活動

サイエンス・メディア・センターを社会に「実装」するために、まずは、法人格を取得することが必要と考え、当初半年間で、法人化を目指した。非営利型の法人として法的にどのような形態を取り得るかを考える際に、予算規模、業務内容を最重要の「枠組」とし、予算規模、「社会に広く役立つサービスを間接受益者が支える」「サービスの内容が文化的な活動である」「当初は助成金などの補助がある」という類似の特徴を持つ法人をモデルとした。具体的には、函館市で、芸術を題材に異文化交流、市の発展を目指す「はこだて国際民俗芸術祭」を運営する一般社団法人をモデルとし、定款を作成して一般社団法人の設立を目指した。

(2)-2：科学者・メディア関係者データベースの構築と運用

SMCJの機能を果たすため、その要となる科学者とメディア関係者のデータベースを構築した。これは、社会的責任として研究内容を語ることができる科学者・専門家とメディア関係者をつなぐためであり、また、科学に関心があるジャーナリストに対して、直接科学者からのコメントを提供するためである。

(2)-3：SMCJの国際活動

平成22年度は、日本の科学技術情報について海外メディアのニーズに応えるよう、最新の科学情報と専門家のコメントを発信してきた。ツイッターや海外SMCのネットワークを通じて科学情報を発信した他には、海外メディア側からは「現場にいる人、または研究に関わっている専門家の話を直接聞きたい」という問い合わせが日本のSMCに来るようになった。海外ジャーナリストにとっても、専門家からの情報や生のコメントには信頼がおけると見なされていることが確認された。

平成23年度2月米国・ワシントンDCで開かれたAAAS annual meetingの調査の結果、多くの科学ジャーナリズム組織の代表たちは、日本に対しては高い科学技術を持っている国だと認めていたが、その実態及び日本以外の国々との相違に関しては掴みかねるという意見が多かった。情報の「sharing（共有）」や海外とのコミュニケーションが不十分だと言える。平成23年度においては、SMCJはこうしたコミュニケーションのギャップをつなぐ役目を果たす予定である。

しかし、日本から海外だけではなく、平成22年度には、状況によって海外の情報が日本のメディアに役立つケースも目立った。これは東日本大震災後のように、ニュースに関して適切なコメントができる日本の専門家が極めて少ない状況で特に顕著であった。他のケースにおいても、日本の研究者が詳しく知らない地形での自然災害、たとえば豪州の洪水やニュージーランド鉱山事故に関する研究などの場合、SMCのグローバルネットワーク（平成23年5月1日現在では英国、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、デンマーク）を通じて海外のトップクラスの専門家コメントを交換できるようになったことの価値は大

きい。

科学技術が関係する次の社会的トピックスに向けて先読みができるように、海外SMCとのネットワークだけではなく、海外の科学ジャーナル広報部やメディアオフィサーとのネットワーク作りが重要になってくると推察される。

(2)-4 : USTREAM中継について

【概要】

会議やシンポジウムにおけるインターネットを通じた情報公開用のツールとして、USTREAMなどのリアルタイム配信サービスの活用が数多く見られるようになった。我々は2010年2月より、大小様々な科学技術系のシンポジウム、会議、サイエンス・カフェ等のインターネット中継を実施してきた(図1)。同時に、より見やすくわかりやすい配信のためのノウハウの蓄積を独自に行っている。

図1 USTREAMによるシンポジウムの中継事例(録画)

The screenshot shows the Ustream interface for a live broadcast. At the top, there's a search bar and navigation tabs for categories like '配信中', 'ニュース', '動物・ペット', etc. The main content area features a video player with a man speaking. To the right, there's a sidebar with event details in Japanese, including the date '2010/07/03' and time '104:54'. Below the video, there are social media sharing options for Facebook and Twitter, and a URL field for copying the link.

【配信方法】

毎回配信が決まると2～3人のクルーが組まれる。配信当日までの流れは、主催者側との打ち合わせ、会場の下見、回線チェック、機材の準備を行うこととなる。当日は、機材搬入・セッティングを行い、リハーサルの後、配信本番となる（写真1）。撤収、機材の返却を行い、すべての業務が終了となる。

写真1 配信の様子

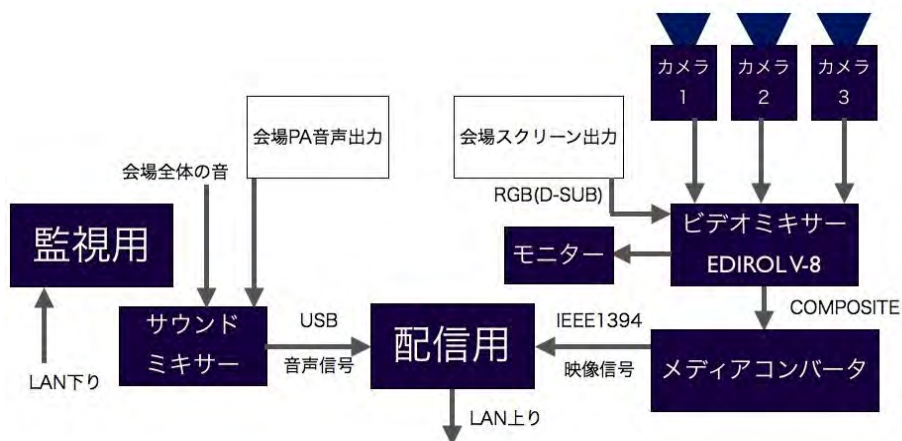


配信機材については、毎回、中継の規模や出演者人数、また、同時通訳の有無、そして予算の額によって選定する。特に、同時出演の人数が多いパネル討論の中継では、議論の進行を視聴者に違和感なく伝えるため、複数のカメラを使用することで、ネット中継にありがちな“誰が何を発言しているのかわからない”といった問題が生じないように留意している。

【配信システム】

現在、我々がシンポジウム等で使用している機材のシステムを図2に示した。シンポジウムにおいては、会場スクリーンのスライド映像を中心に進められることが多い。そこで、図に示したように、会場スクリーン出力と複数台のカメラの映像を、ビデオミキサーでスイッチングし、適宜ワイプで合成することによって、より専門的な講演であっても、視覚的にわかりやすい配信となるように常に心がけた。

図2 USTREAM配信のシステム事例



一方で、USTREAM配信でよく言われることは、音声品質の重要性である。インターネットの動画は、映像が多少悪くとも、音声伝われば内容をある程度判別できる。そこで、我々は、基本的にどの会場でも、使用しているPAシステムからダイレクトに音声を出力し、それをサウンドミキサーでフォローしながら配信を行った。このことで聞き取りやすいクリアなサウンドで配信を行うことができた。また、会場からマイクでひろった音を適宜ミックスしながらレベルを調整し、配信に使用することで、突発的な質問者の声のような非常にレベルの低い音声に関してもリアルタイムにフォローすることができた。

(2)-5：研究活動

平成21年度に引き続き、2009年に起こったインフルエンザH1N1パンデミック2009の報道分析を継続した。コンペティションを通じてNHKアーカイブスの使用許可を得たことから、平成21年度に明らかになったTV報道の影響を測定するための研究を行った。

またH23年度からは、ネットにおける科学技術報道の様式を調査するため、インターネット発達後のメディア変容の最中にある現代における「持続的ジャーナリズム」のモデルを分析し、SMCJの持続的活動に向けた情報を獲得することを目指す。この調査のために、フィンランド・タンペレ大学、アメリカ・南カリフォルニア大学とSMCプロジェクト実施者である早稲田大学の協働のもと、調査体制の確立を行った。

(3) 研究開発結果・成果

(3)-1：SMCJの社会実装に向けた活動

平成22年10月1日付けで「一般社団法人 サイエンス・メディア・センター」を設立し、プロジェクトの実質化・本格化に向けて活動を開始した。

これにより、オーストラリアのサイエンス・メディア・センターと一緒に取得した、日豪基金からの助成金の受け皿ができ、国際的な科学情報の発信分野にスタート時のテコ入れを行うことができています。

研究開発年度の2年目を迎え、設立した法人の理事（経営の責任主体）を中心に年度の事業計画を作り、新たに、事業を推進しようとした矢先に震災に見舞われ、必要な理事会・総会を開くことができず、新しく作った社団法人をどう運営していくかは決定がなされていない。

今後は、早急に理事会を招集し、新年度事業立案を行うことが必要である。その際、助成金終了後の活動を維持している「はこだて国際民俗芸術祭」についてあらためてヒアリングを行い、持続可能性や会員の募集、事業収入のあり方について、検討を行う。

週1回を目標として、ジャーナリストに向け「サイエンス・アラート／ホット・トピック」を発行することを活動の軸に置き、これに付随するデータベースや国際協働の充実を行った（後述）。

(3)-2：科学者・メディア関係者データベースの構築と運用

研究者の情報を網羅的に把握することを前提に構築を進め、J-globalなどの研究者データベースを参考に制作を開始した。昨年度に構築したプロトタイプのデータベースは以下の点で、大きく改善させる必要があった：

- ・ 詳細な項目設定は、登録する際の作業量を増大させ、サイエンス・アラートやホット・トピックなどの業務を圧迫することが懸念された。
- ・ 科学者にWeb上で登録してもらう場合、時間がかかり、登録自体が負担となり、登録者の意欲を減退させる可能性もある。web上での登録が自動的にデータベースへと登録されるシステムの構築を外部発注することも考慮したが、費用および、その後のシステムの修正時に求められるメンテナンスの容易さやコストを考慮すると適切ではないと判断した。
- ・ 研究者の情報を網羅的に把握しているデータベースが、実際の業務上どの程度役に立つのかが不明瞭であった。
- ・ 事実として、データベースの構築後SMCJ内で使用する場合に、どのように使用するのが明確になっていなかったため、利用する際の使いやすさや目的を加味した状態で設計することができなかった。

以上の課題に関し、豪州のSMCからデータベースの担当者を招き、豪州SMCのデータベースの使用方法などをヒアリングする機会を得た。

そこで、データベースを構築するために使用したアプリケーションである「File Maker Pro」の各設定の見直しやリレーションシップの設定などのアドバイスを受けた。

また、実際に豪州SMCがどのようにして検索を行っているのかをヒアリングし、運用する際の条件が明らかになった。

たとえば、学術的なカテゴリからの検索は効率に問題がある。「生物学」という大きな分類の中には、基礎生物学、生物科学、人類学などの分類がある。基礎生物学内では、遺伝・ゲノム動態、生態・環境、植物生理・分子、形態・構造、動物生理・行動、生物多様性・分類などと分かれている。生物科学内でも同様に下位分類がある。さらに、その下位分類中でもさらに細かく分野や専門が分化している。よって、このような学術的な研究分野の分類自体をデータベースに入力するには膨大な作業量を要し、専門用語から特定の専門家や研究者をデータベースで抽出すること自体が効率的ではない。

なぜならば、社会の中で問題となる出来事は日常生活の中で使用されることばにより表記される。たとえば、「ドングリ類の不作によるクマの出没」といった場合に、「生物学」や「生態」などのキーワードでの検索ではツキノワグマなどの専門家にたどりつくために更なる検索が必要となる。

むしろ、「ドングリ」や「クマ」といったような日常生活の中で使用されることばで検索をかけ、そのキーワードに関連した研究している研究者を抽出することのほうがより効率的に該当する研究者を選定することができる。そのためには、学術用語、一般用語の併用が求められる。

そこで、検索対象のデータ内に研究領域などの分野名やテーマ、キーワード、研究者個人の関心などを一つのデータとして扱い、そのデータ内で一括して検索する方法を採用した。これにより、検索が容易になることに加えて、既存のマスメディアが使用する言葉や言い回しを直接使用することができるようになった。

さらに、この改善により登録時の作業が軽減され、さらに検索する際も、様々な検索用語に対応できるようになった。

科学者データベースの改善を参考に、メディア関係者のデータベースも同様の改善を行った。この改善の結果、データ入力及び閲覧時の作業効率が改善した。

(3)-3 : SMCJの国際活動

平成22年4月から平成23年3月までには、海外からの問い合わせは35件にのぼった。最新のロボット技術、電気工学、人工竜巻や再生医学に関する研究、幅広いジャンルで情報を求める報道者と連絡を取り合ってきた。

海外SMCからの情報を日本語に翻訳し、再発信したRapid Roundup(SMCJではScience Alert)数は7本である。

問い合わせは英国、オーストラリアとニュージーランドからが多く、各国のSMCからの推薦でSMCJの事務所まで連絡したという。中には科学雑誌New Scientistの英国局と豪州局や全国放送である豪州ラジオ局Radio Australiaなど特に大きなマスメディアも含まれた。

最も大きなインパクトがあった事件は平成22年6月13日に起きたJAXA小惑星探査機「はやぶさ」の帰還であった。オーストラリアSMCとSMCJの協働の結果、オーストラリアSMCのスタッフ一名が、ウーメラ砂漠ではやぶさのカプセルを回収した探査隊と同行した。また、オーストラリアSMC(AusSMC)が開いたプレス・ブリーフィングに日本の科学者も出席した。その結果、オーストラリアとニュージーランドの報道機関のみならず、英国のBBCからもAusSMCには問い合わせがきた。このイベントだけでも、これまでにAusSMC/SMCJの提供した情報や科学者のコメントを利用した記事・番組は少なく見積もっても1000件以上にのぼっている。

(3)-4 : USTREAM中継について

(3)-4-1 : 現在までに行った中継

昨年2月から現在に至るまで、ほぼ毎月科学技術系のシンポジウムで、USTREAMの中継を行うことができた（主なものだけでも15回）。

これらの配信によって、都市圏で開催されることが多い大規模なシンポジウムは、事実上インターネットが繋がるのであれば世界中どこからでも視聴することができ、我々はそのような機会を提供することに寄与することができた。同時に、視聴者は、メールやTwitterなどを利用することでイベントに参加することができる。現在のところ、そのようなやり取りを促すような仕組みの整備までは至っていないが、今後、そういった需要は多くなると思われる。それらのオペレーションのノウハウの蓄積についても、今後行っていく必要がある。

技術面で言えば、配信を始めた昨年の初め頃は、リアルタイムによる動画配信のシステム自体がまだ不完全であったこともあり、確実に配信するには、配信帯域の制限など送り手側が慎重に調整する必要があった。しかし、現在は、その問題もプラットフォーム側のサーバ増強による努力や、通信速度の高速化によって徐々に解決され、現在は、配信動画の一時切断の頻度は極端に少なくなった。また、配信を行うごとに配信機材の不具合を調整したことによって、機材のトラブルやソフトウェアの不具合なども現在はほぼ無くすことができた。

また、リアルタイムに配信された動画は、USTREAM上のサーバ上に保存することができる。この機能を使うことによって、公開の許可がとれた素材は、アーカイブ化して残し、見逃した人向けのサービスを行うことができた。また主催者や登壇者の要望に応じて、録画素材の提供も行うことができた。

(3)-4-2：問題点と今後の課題

一方で、問題点としては、配信の信頼度や品質を高めていくうちにシステムが大規模化し、小回りの利く配信ができなくなるなど、機動性が下がるといったこともあった。映像スイッチャーや音声ミキサー等のハードウェアはソフトウェアによる代替も一部可能であるが、現在のところ安定性の面でハードウェアによるシステムの方に分がある。会議の規模や状況に応じて適切な規模の機材を選択しつつ、よりコンパクトで安定性の高い配信ツールのシステムを構築していくことが必要となろう。

今後も多くのイベントにおいて、情報の透明化やアーカイブ化の社会的要求が益々高まっていくものと考えられる。そのような状況下で、サイエンス・メディア・センターのような組織体が、積極的に情報発信行いハブとなることで社会と科学・技術の結びつきを強めていくためにも、積極的に新しい発信ツールを活用していくことが重要である。

(3)-5：研究プロジェクト

NHKアーカイブスを用いたH1N1パンデミック2009の報道分析は、多くの成果を得て終了した。詳細については割愛するが、リスクを含む科学報道において必要な時間的条件等、今後の報道において大きな示唆となるデータが数多く得られた。この成果は平成23年中にも発表の予定である。

また、平成23年度に欧米日で調査予定である「持続可能なジャーナリズム・ビジネスモデル(“Mapping and Understanding Sustainable Business Models for Journalism”, SuBmoJour)」計画についても、その体制作りと予備調査を完了した。

(4) 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2010年5月 12日	国際SMCオンライン・ミーティング	(オンライン)	海外SMC (イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ) との会議
2010年6月 2日	プロジェクト運営 ミーティング	早稲田大学	研究協力者との会議
2010年7月 30日	プロジェクト運営 ミーティング	早稲田大学	研究協力者との会議
2010年9月 24日	理事会	早稲田大学	一般社団法人設立に向けた理事会
2010年11 月26日	プロジェクト運営 ミーティング	早稲田大学	研究協力者との会議
2010年11 月2～8日	サイエンス・メディア・センター・オーストラリア	豪州・アデレード	海外SMCの活動の見学
2011年2月 17～22日	AAAS annual meeting	米国・ワシントンDC	米国でのサイエンス・ジャーナリズムに関する勉強とジャパンパッシングについての調査

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

4-1: 海外からの科学報道情報素材の国内向け発信について

日本国内の報道に関連した科学 이슈に際して、特に国内で専門家が見つげにくい場合には海外専門家のコメントを入手して日本語に翻訳し、出来上がったScience Alertを国内メディアに向けて発信した。これには下記の様なものがある：

- 平成22年10月メキシコ原油流出事故に関する海外専門家のコメント。
- 平成22年10月豪州バイオテク意識調査について専門家のコメント。
- 平成22年ノーベル賞受賞者に関するコメント。ノーベル賞を受賞した研究者本人や知人からのコメントをいち早く入手できた。
- 平成22年11月ニュージーランドの炭鉱爆発事故について現地の専門家からの情報とコメント。現地の地形や歴史に詳しい専門家が日本国内にいなかったため、現地の専門家のコメントが重要だった。
- 平成23年1月豪州・クイーンズランド洪水について現地の専門家からの情報とコメント。
- 平成23年3月東日本大震災に係る海外専門家のコメント。

逆に日本から海外へ発信したScience Alertは、特に平成23年3月11日の震災以降に10本以上に達している。

4-2：日豪共同・国際メディア・ブリーフィング

USTREAMを用い、日本・オーストラリア共同での国際メディア・ブリーフィングの社会実験を行った。また、RISTEX-i2TAプロジェクトの吉澤氏にご参加頂くことにより、同プロジェクトの成果をジャーナリストに還元することを狙った。

4-2-1：イベントタイトル

「国際ナノテクノロジー技術会議に関するオーストラリアとの共同国際メディア・ブリーフィング」

4-2-2：実施内容の概要

「第10回国際ナノテクノロジー総合展・技術会議」に際して、日豪の専門家同席のもと、オーストラリア・サイエンス・メディア・センター(AusSMC)と、オンライン・メディア・ブリーフィングを実施した。

(英日・二カ国語で配信)

4-2-3：ブリーフィングの目的

- ・豪日のジャーナリストに対し、ニュース・トピックを提供する。
 - ・ nano tech 2011の意義周知
 - ・ ナノテクの現在を、講演者の専門（医療応用等）を中心に概説。
 - ・ 最新のナノテク動向に関し、テクノロジー・アセスメントからの視野を含めて提供。

4-2-4：社会実験としての目的

- ・ 科学のトピックを海外のジャーナリスト、また日本の地方ジャーナリストに対して提供する。
- ・ オンラインでのメディア・ブリーフィングの実験を行う。

4-2-5：ブリーフィング日時・会場

日時：2011年2月17日 12:30-13:30

場所：東京ビッグサイト会議棟 8F 801会議室

nano tech 2011 国際ナノテクノロジー総合展・技術会議 会場

4-2-6：出席者

司会：

吉澤剛先生(東京大学公共政策大学院 特任講師, I2TAプロジェクト)

講演者：

ゴードン・ウォリス教授(Prof. Gordon Wallace) (ウォラゴン大学)

<http://ipri.uow.edu.au/people/UOW001346.html>

鳥光慶一先生 (NTT 主席研究員 分子生体機能研究グループ グループリーダー)

4-2-7：実施内容の手順

※ブリーフィングの様子は、PasswordロックされたUstreamで配信した。URL, Pwdは関係者、日豪ジャーナリストに対して事前に配信された。

※ブリーフィングは英語で進行。別チャンネルで同時通訳し、日本語でも配信された。

4-2-8：全体の流れ

11:30-12:00 先生方会場入り

<12:30に中継開始予定>

12:30-12:35 吉澤先生：ブリーフィングの主旨説明、nano tech 2011、ナノテクと社会の現在に関する簡単なブリーフィング (Approx. 5 min.)

12:35-12:45 鳥光先生：研究内容の紹介 [5-7 min.]

12:45-12:55 Wallace先生：研究内容の紹介 [5-7 min.]

12:55-13:30 記者からの質疑応答

(Time Zone:Tokyo, Sydney: Starts from 2:30 pm)

・質疑応答においては、質問をTwitterを使用して受け付けた。その場でリアルタイムに対応した。

4-2-9：Ustream配信チャンネル

日本語用 <http://www.ustream.tv/channel/smc-nanoj>

英語用 <http://www.ustream.tv/channel/smc-nanoe>

4-2-10：Twitterを介しての質問

USTのウィンドウか、@smcj_live 宛にTwitterを使用して質問を受け付けた。

質問は、英語でも日本語でも対応した。

4-2-11：Emailを介しての質問

※Twitterが万が一ダウンした場合、Twitterアカウントが無い場合は、Emailで質問を受け付けることとした。

5. 研究開発実施体制

(1) SMCJグループ

- ① リーダー 瀬川 至朗 (早稲田大学政治経済学術院 教授)
- ② サイエンス・メディア・センターの構築及びその運営業務全般

6. 研究開発実施者

氏名	所属	役職
瀬川 至朗	早稲田大学政治経済学術院	教授
田中 幹人	早稲田大学政治経済学術院	准教授
難波 美帆	早稲田大学 政治学研究科	准教授
角林 元子	早稲田大学 政治学研究科	研究助手
永井 健太郎	早稲田大学政治学研究科 ジャーナリズムコース	博士課程
白田 茜	フリーライター	
綾部 広則	早稲田大学理工学術院	准教授
中村 理	早稲田大学政治学研究科	助教
宗像 慎太郎	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング	副主任研究員

東島 仁	金沢大学	博士研究員
漆原 次郎	JASTJ/科学ライター	理事
尾白 登紀子	NPO 日本 IDDM ネットワーク	広報担当
岡田 小枝子	理化学研究所広報/科学技術広報研究会	広報
関口 香里	NPO 日本 IDDM ネットワーク	東京事務局
南波 直樹	理化学研究所	広報国際化室 チーフ・コーディネーター
藤田 貢崇	北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット	特任助教
大石 かおり	フリーライター	
吉戸 智明	早稲田大学 政治学研究科	客員講師
渡邊 友一郎	早稲田大学政治学研究科 ジャーナリズムコース	修士課程
吉永 大祐	早稲田大学政治学研究科 ジャーナリズムコース	博士課程
樋口 嘉昭	早稲田大学政治学研究科 ジャーナリズムコース	博士課程
山下 真規恵	早稲田大学政治学研究科 ジャーナリズムコース	修士課程

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. シンポジウム等、対外的な情報発信

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2010/7/21	第1回SMCセミナー「新型インフルエンザ報道をふりかえる」	早稲田大学 早稲田キャンパス 1号館401号室	30人	科学技術を伝える手法について、広義と演習を組み合わせ、研究者と広報業務に携わる者が3日間学んだ。
2010/9/18-20	夏期集中ワークショップ「科学を伝える作法を学ぶ～手から頭から」	早稲田大学 早稲田キャンパス 1号館403号室	35人	科学技術を伝える手法について、広義と演習を組み合わせ、研究者と広報業務に携わる者が3日間学んだ。
2010/11/25	特別ワークショップ「科学技術の国際広報を考える」	早稲田大学 早稲田キャンパス 1号	25人	科学技術の広報について、米国でサイエンスライターや企業や研究機関の広報、大学教

		館409号室		員として関わってきた講師を招き、講義形式で学んだ。
2010/11/26	「サイエンス・メディア・センター スタートアップ・シンポジウム」	早稲田大学 小野記念講堂	70人	オーストラリア、イギリスのサイエンス・メディア・センターから代表やマネージャーを招き、海外での活動について報告、また日本と米国からオブザーバーを交え、今後のサイエンス・メディア・センターの活動についてディスカッションした。
2011年2月 17日	「ナノテクノロジーの医療応用について」	東京ビッグサイト		2月16日から東京ビッグサイトで開催された「第10回国際ナノテクノロジー総合展・技術会議」の会期中、オーストラリアと日本の専門家をお招きし、「ナノテクノロジーの医療応用」に関してメディア・ブリーフィングを実施した。
2010/3/18 (震災のため延期)	3年目の危機をどう乗り越えるか 助成終了後を見すえてのファンドレイジング	早稲田大学	30人	文化活動をにやう非営利団体がどのように持続可能な資金調達を図るかについて、勉強会を開催予定であった。

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

7-2-1: 印刷発表物

●日付：2009.12

雑誌名：JASTJ NEWS (Vol. 53)

タイトル：サイエンス・メディア・センターを日本につくる

執筆者：瀬川至朗

●日付：2010/12

雑誌名：JASTJ NEWS (Vol. 57)

タイトル：期待されるSMCの役割

執筆者：永井健太郎、瀬川至朗

7-2-2: ウェブサイト構築など

●「(社)サイエンス・メディア・センター」日本語ウェブサイト

<http://smc-japan.org>

・平成22年5月から開始。平成23年3月震災後にダウン、その後再構築。

● 「Science Media Centre of Japan」 英語版ウェブサイト

<http://smc-japan.org/eng/>

・平成22年7月16日から翻訳開始。平成23年3月震災後にダウン、その後再構築。

●サイエンス・メディア・センター：ツイッターアカウント

@smcjapan 平成22年7月13日開始

フォロワー数：15386人(2011年5月1日付け)

つぶやき数：312 (2011年5月1日付け)

●サイエンス・メディア・センターの英語版ツイッターアカウント

@smcjapan_eng 平成22年7月13日開始

毎日、日本国内のニュースをピックアップし、ツイッター上で英語を使って発信。

フォロワー数：334人 (2011年5月1日付け)

つぶやき数：412 (2011年5月1日付け)

7-2-3：サイエンス・コミュニケーター育成事業の研修会講師について

名古屋大学のサイエンス・コミュニケーター育成事業における月例研修会の講師として、USTREAM配信の実習を行った。実地研修(OJT)を中心として能力向上にとりくんでいるサイエンス・コミュニケーター(7名)に対し、具体的にはサイエンス・カフェにおけるUSTREAMの活用方法について、また、機材の選定について指導した。

日時：2010年2月23日(水)1000～1200時。

場所：名古屋大学インキュベーション施設 1階プレゼンテーションルーム。

対象者：本事業により、実地研修(OJT)を中心として能力向上にとりくんでいるサイエンス・コミュニケーター。

7-2-4：学会以外のシンポジウム等への招へいによる講演：

下記 「招待講演」を参照のこと。

7-2-5：サイエンス・カフェ等への参加

●日時：2010/9/25

イベント名：女子中高生のための関西科学塾2011第一回

プロジェクトからの参加者：難波美帆

●日時：2010/11/9

イベント名：第一回 生体ライブ映像の主役「蛍光プローブ分子」の開発者が追っていること

プロジェクトからの参加者：難波美帆

●日時：2010/11/16

イベント名：第二回 細胞ライブカメラが追う、まだ誰も見ていない世界

プロジェクトからの参加者：難波美帆

●日時:2011/1/18

イベント名：さあ、科学者と免疫を語ろう 免疫の不思議

プロジェクトからの参加者：難波美帆

7-2-6 : 海外の雑誌掲載記事支援

●New Scientist “What would it take to put a walking robot on the moon?”(04 May 2010)

<http://www.newscientist.com/article/dn18852-what-would-it-take-to-put-a-walking-robot-on-the-moon.html>

●The Japan Times “Synthetic life zaps 'the soul'” (13 June 2010)

http://search.japantimes.co.jp/cgi-bin/fe20100613rh.html?utm_source=twitterfeed&utm_medium=twitter

●New Scientist “Computer beats human at Japanese chess for first time” (12 Oct 2010)

<http://www.newscientist.com/blogs/shortsharpscience/2010/10/computer-makes-the-winning-mov.html>

●New Scientist “Artificial tornadoes created to test Japanese homes” (03 Dec 2010)

<http://www.newscientist.com/article/dn19813-artificial-tornadoes-created-to-test-japanese-homes.html>

7-3. 論文発表 (国内誌 0 件、国際誌 0 件)

7-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

① 招待講演 (国内会議 4 件、国際会議 1 件)

- ・田中幹人「科学ジャーナリズムの立場から：議題構築機能を果たすために」科学コミュニケーション研究会 (第2回), 東京大学 小柴ホール(7.24.2010)
- ・田中幹人「研究者のためのメディア・トレーニングについて」理化学研究所BSI(8.5.2010)
- ・田中幹人「メディア空間の生命観～『生命』定義を媒介する枠組みの現在」『細胞を創る』研究会, 東京大学(11.13.2010)
- ・Mikihito Tanaka “Science and Media in Japan” at “Science and Citizenship Conference” “Science and Media” 10th anniversary conference, Welcome Trust (12.14.2010)
- ・田中幹人「ジャーナリズムはリスクをどう伝えるべきか-研究者とメディアの協働に向けて」食品安全文化フォーラム, 東京工業大学キャンパスイノベーションセンター (3.28.2011)

② 口頭講演 (国内会議 2 件、国際会議 1 件)

- ・Mikihito Tanaka Masanori Watanabe, Makie Yamashita, Kaori Oishi and Shiro Segawa “The Mask Capriccio’ over the swine flu in Japan” The Society for Social Study of Science, Tokyo Univ. (8.26.2010)
- ・田中幹人, 田中亮, 瀬川至朗「ウェブ上の科学ニュース・ヘッドライン選択行動の分析」科学技術社会論学会, 東京大学駒場キャンパス (8.29.2010)
- ・田中幹人「専門知の大衆化とジャーナリズムの議題構築」STSNJ, 総合研究大学院大学 (9.18.2010)

- ③ ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

- ① 新聞報道・投稿
朝日新聞 2011年3月23日（オピニオン欄、インタビュー記事）
- ② 受賞
特になし。
- ③ その他
<学術雑誌掲載>
●日付：2011/1/21
雑誌名：The Lancet (Vol. 377)
コラム名（社説等）：World Report
タイトル：Science Media Centres go Global
執筆者：Tony Kirby